



「安心してまちがえぬ」。小学の年生の兄の若き担任がモットーにしていたフリースが文集のタイトルになっていました。それをみる小一の私に意味がわからずはありますがありませんでした。

最近、小学生を見て気になることがあります。まちがいの直し方です。テストやドリルでまちがうと、赤で×がつきます。その答えを消して正しい答えを書きなさいというものです。

まちがいは、あっちゃいけないこと。悪いこと。だから消す。存在しているものをみとめず無かったこととする。それは抹殺と言いつく、怒ることにします。そんなこと自覚してないだろうけど、「誰か」といってわざとな行為が日々重なりあっている。そういう意識が作られた。「正解」のみが許される狭い思想が出来てくるのです。

人は、まちがう生きものです。それを認めること、ただす道が開かれ、「あやまちは一度と繰り返しません」という決意が起ってきます。まちがいや失敗はしちやいけないと思つと、それを隠すようにする、繰り返すようにするのです。

今の社会はまちがえを撲滅しようとするかのように見えます。失敗を過度に責める無責任な報道も日常茶飯事で、その風潮は、事故が起きると隠蔽するといった事件の土壌になっていると思われれます。

失敗撲滅社会では、ひとは挑戦しなくなりえます。臆病になりえます。失敗をおそれて安全な道ばかり選び、先の見える、既存のしるしに乗るので、冒険は必要ありません。新しいことでもきかぬ。失敗させてもらえぬこと、新しいことは経験がなければならぬこと、新しいことです。経験には是非善悪を身をもって知るべきであり、痛

い目を見ることですからあります。まちがいは「正解」ではあませんが、まちがいから学ぶなら正解以上の経験です。
まちがいや失敗という否定的なものを取り込んでこそ豊かになる、そんな考え方が広がったら、安心して間違えることができてほしい。

某市の教育委員会の先生は「失敗したら、まず笑え」とおっしゃいました。これは、他人が失敗したことを伝えてきた時、まず笑って応えるということ、自分が失敗した時も笑い飛ばすというような両方のコミュニケーションで言われたように感じました。

だいたい、まちがったことを一番気に病んでいるのはまちがった本人でしょう。目の前が真っ白になり、ドキドキ、後悔する。そういう経験を皆おもちのことと思います。そんな重い目を負った状態なのに、とがめられ、責められる。

しかしその失敗を、笑って受容してくれる雰囲気があるなら、ひとは堂々とまちがえることができ、びびりや羞恥感も減ります。

否定的なものを肯定的に受けとめる底抜けの立場を宗教といえます。念仏詩人と呼ばれた榎本栄一さんの詩でシメしよう。

またひとつ
つくじった
つくじるとびつ
目があつて
世の中がいつ
ついでなる

